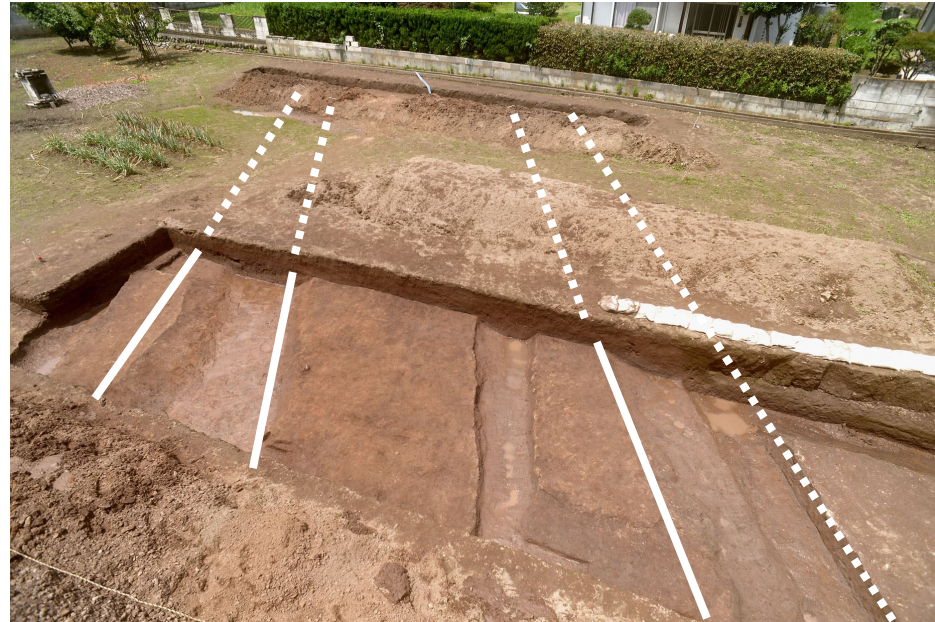


上野国府への道 ～東山道駅路国府ルートの確認～



確認された東山道駅路。中央部分が路面で両側に側溝を持つ。

平成28年度の調査では、上野国府の位置を推定する上での参考とするために、東山道駅路国府ルートの調査を鳥羽町内で実施しました。

国府が設置された時代、日本国内は都の周辺の「五畿（ごき）」と、それ以外の地方「七道（しちどう）」に分けられていました。「東山道」は七道の1つで、現在の滋賀県から東北地方にかけての内陸地域にあたり、上野国も東山道に属していました。駅路とは地方の国々と都を結ぶために建設された道路

で、東山道駅路は、東山道を縦貫するように走っています。

かつて高崎市の浜川町付近から元総社町方面へ向かう地割や道が残っていましたが、これは東山道の名残りといわれていました。また、その説を裏付けるように、この地割に沿うように古代の道路跡が点々と確認されています。群馬県内では、「国府ルート」のほかにも東山道駅路と考えられる古代の道路跡が高崎市、玉村町、伊勢崎市、太田市内の遺跡で見つかっており、「牛堀・矢ノ原ルート」・「下新田ルート」の2つの路線が想定されています。

今回、鳥羽町での発掘調査で確認された道路跡は、一部が後の時代の溝などで壊されていましたが、道路の路面幅は約5mで硬く締まっていた。また、両側には幅2～3mの側溝が掘られていました。なお、その南側にも平行して道路跡とその側溝があることや、道路面の下からも古い時期の側溝と考えられる溝が確認できたことから、改修や敷設替えが、複数回行われたと考えられます。

今回の道路跡は、国府推定域まで約1kmという地点での確認となりました。今後、東山道駅路国府ルートがさらに東の地点で確認され、上野国府の解明の手掛かりになることが期待されます。

平成28年度上野国府等範囲内容確認調査

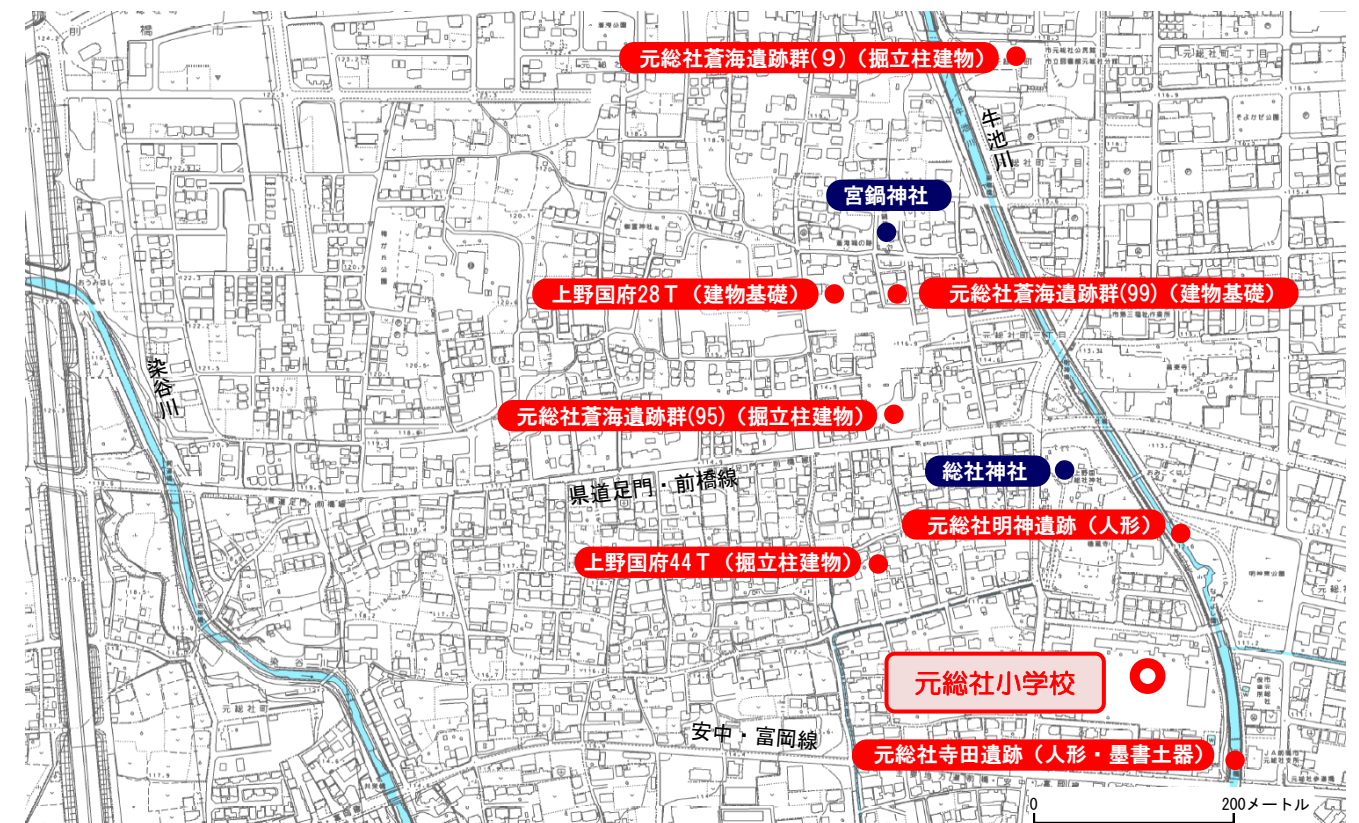
元総社小学校の発掘調査

前橋市教育委員会事務局 文化財保護課

〒371-0853 前橋市総社町三丁目11番地4 TEL：027-280-6511

平成28年度 上野国府等範囲内容確認調査

元総社小学校の発掘調査



上野国府の調査

「国府」とは、奈良・平安時代の律令制度下における地方政治・経済の中心施設で、全国に設置されました。当時、現在の群馬県は「上野国」と呼ばれていましたが、その中心となる「上野国府」については、詳しいことは分かっていません。ただし、平安時代の書物「和名類聚抄」には、上野国府は「群馬郡」にあったと記載されているほか、これまでの研究や発掘調査で、現在の前橋市元総社町付近に設置されたと考えられています。

前橋市教育委員会では、平成23年度から、上野国府の解明を目的とした「上野国府等範囲内容確認調査」を、区画整理の進む元総社町の蒼海地区を中心に実施しています。

元総社小学校の発掘

元総社小学校の校庭では、昭和37年に群馬大学による発掘調査で掘立柱建物跡が2棟確認されています。また、その東側を流れる牛池川沿いで実施された発掘調査（元総社明神遺跡・元総社寺田遺跡）で、国府に関連した施設名である「国厨（くにのくりや）」「曹司（そうし）」などと墨書された土器や、国府での儀式に使用されたと考えられる「人形（ひとがた）」が出土しています。このことから、元総社小学校周辺に国府に関連する施設が存在した可能性が考えられたため、平成25年度から発掘調査を継続しており、4年目となります。

今年度の調査では、大型の掘立柱建物跡が、新たに見つかりました。

元総社小学校の発掘調査のあらまし

建物跡と溝跡 (H26調査)

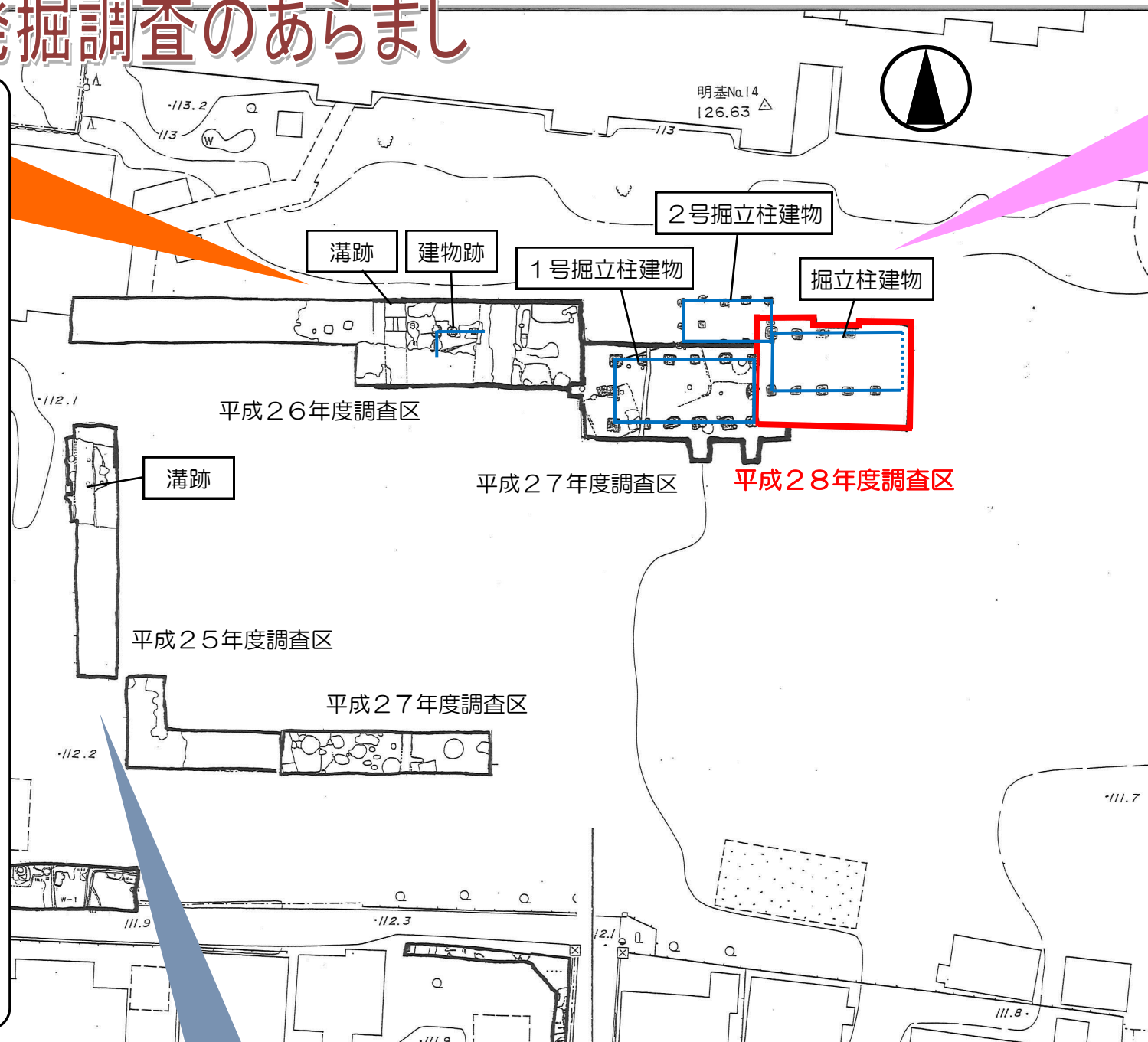
平成26年度の調査では、建物跡と溝跡が確認されました。

建物跡は、攪乱や中世の溝により大きく壊されていましたが、柱を据えたと考えられる穴が3個確認できました。東西南北を意識した建物と推定され、柱穴の上に平安時代中頃の住居が造られてされていたことから、その頃には建物が無くなっていたと考えられます。また、柱穴を埋めていた土は縞状で非常に固く締まっていた。

溝跡は幅約2m、深さ約1mで、南北方向に掘られていました。



建物跡の柱穴の状態



建物跡の再確認と新たなる発見 (H27・28調査)

平成27年度の調査では、昭和30年代に行われた元総社小学校庭遺跡の発掘調査で見つかった大型の掘立柱建物跡（1号掘立柱建物）の詳細を調べるために、再調査を行いました。

1号掘立柱建物は東西南北を意識して建てられた東西方向に長い建物で、東西（桁行）5間、南北（梁行）2間を数えます。また柱間についても、桁行は1間が9尺（約2.7m）、梁行は1間が10尺（約3m）となっていました。柱穴はどれも地山を掘り込んでしっかりとしたつくりをしていました。



平成27年度調査で再確認された1号掘立柱建物

また、昭和30年代の調査で、1号掘立柱建物の東側の棟持柱とされた柱穴の東側で、新たな柱穴が確認されたことから、平成28年度は、さらに東側で建物等が確認できるかを目的に調査を行いました。その結果、1号掘立柱建物に近接して1間分北にずれた掘立柱建物を確認できました。

この掘立柱建物も、東西南北を意識して建てられており、桁行、梁行ともに1号掘立柱建物とまったく同規模で建てられていたと推定されます。また、1号掘立柱建物の東側棟持柱とされた柱穴は、この掘立柱建物の柱穴の一つであることが判明しました。柱穴は1号掘立柱建物よりも浅く、柱を据えた部分だけ深く掘った柱穴や、礎板？と考えられる扁平な石が底面に置かれたものも存在します。

なお、平成28年調査では、昭和30年代の調査時の2号掘立柱建物の一部も再確認できました。残念ながら建物の新旧関係はわかりませんが、この2号掘立柱建物の東側の柱列と、今年度確認できた掘立柱建物の西側の柱列が、同一軸上にあることが注目されます。

今後、これまでの調査で確認された建物の関係や構造の解明が課題となっています。

古代の溝と出土した土器 (H25調査)

平成25年度の調査では、南北に続く幅約2メートルの溝が確認されました。

溝からは多くの土器の破片が出土し、その中には、一般的な集落では使われないような非常に丁寧なつくりの土器が多く含まれていました。また、「卒(奉)」や「大家(おおやけ)」と読める文字が墨で書かれた土器も出土しました。これらのことから、公的な施設で使用されていた土器が溝に捨てられたと考えられます。



溝跡から出土した土器とその状態



「卒(奉)」の墨書土器（赤外線写真）